

今年は日本、韓国、フィリピンから、ネオクラシック・バレエ、モダンダンスも含む多様なスタイルの10組がファイナルに進んだ。そのなかで高く評価されたのは、舞踊史の理解と現代社会に対する問いかけに基づく明確なコンセプトを、強い身体で提示し得た振付家だった。映像を巧みに使い虚構と現実の同期・離反を過去・現在・未来の時間に散りばめ、知的なユーモアに満ちたチェ・ミンソン/カン・ジンアンのデュオ（審査員賞）、今日における労働の非人間性の考察から人間とコンクリートブロックを等価に扱い、8人の男性ダンサーが切実なエネルギーを爆発させる田村興一郎の作品（在日フランス大使館賞）、社会にひっそり埋もれたたごく個人的な物語を独特の動きで繊細に綴ったイー・ギョングのソロ（奨励賞）は、いずれもテーマと振付が緊密に連携し、説得力を持っていた。ベストダンサー賞の北尾亘とキム・ソヨンは、社会の現実と夢想の間での個人の葛藤を、それぞれの個性を生かした身体言語で語った。他の作品もそれぞれ印象に残る点があり、このコンペティションが広く開かれた実験の場、可能性の萌芽の場であることを実感させた。

岡見さえ

コンペティションIは、昨年よりもライブ（本番）での作品の面白さが全体的に際立っていた。映像上では中々判断しづらい感情の起伏のような表現がしっかりと伝わる作品が増えたのは今回の全体での評価できることだろう。個人的にはフィリピンからの作品が、当たり前のように上演されていたことは嬉しい（15年前は、フィリピン国内のコンテンポラリーダンサーは全部で1桁くらい）。さらには韓国のチームの表情を完全に削ぎ落として映像を駆使する技法も、新しい局面がはじまったとも言える。コンクリートブロックを多用する日本の作品は、ひさびさに見た男性の汗っぼさの表現であり、集団の強さも感じた痛快な作品であった。

今回の全体を見回した時には、今後のすべきことも少しよぎる。みながダンサーとして今後どのように力をつけ見せてくれるか、今後いかに作品づくりを続けていくか、何を本当に伝えたいのかを深く見つめてほしい。それが結局、この種のダンスの未来の見え方につながっていくのではないかと思う。

近藤良平

今回は映像審査の段階から韓国の変化を感じた。先生のフォロワーやヨーロッパ直結感ではなく韓国の若いアイデンティティ、ローカリティを感じた。ファイナリストの3組も素晴らしく、審査員賞のチェ・ミンソン/カン・ジンアンは作品としての面白さはもちろん、对身体、対観客（そしてカメラマン）のアクチュアリティに痺れた。奨励賞のイー・ギョングはオリジナリティあふれる振付、自身の体験を元にしたテーマの現代性、ローカリティの持つ強さ、アジアの可能性を感じた。ベストダンサー賞のキム・ソヨンは身体性、振り付けも素晴らしく、更にダンスへの問いが欲しい。日本からも若い力の出現が嬉しい。特に田村興一郎、水中めがね∞はコンペティションIIを経験してからのコンペティションIファイナリストとなり、単なるコンペではない横浜ダンスコレクションの可能性を今後の業として背負わせたい。既に振付家として各方面で活躍している北尾亘のソロも技術点、出来栄え点ともに高く、ベストダンサー賞の名に相応しいダンサーとしても高いポテンシャルがあることを見せてくれた。アジアの表現はローカリティが強みだと感じている、日本のローカリティ（トラディショナルではなく）を感じさせる振付家の出現も期待したい。

多田淳之介

今年もヴァリエティに富んだ作品が並んで面白かったが、なかでも若手振付家のための在日フランス大使館賞を手にした田村興一郎『F/BRIDGE』が圧巻だった。田村は昨年のコンペティション II 最優秀新人賞受賞者公演『Yard』でも著しい進境を見せたが、『Yard』が“静”の狂気を帯びていたのに対し、今回の『F/BRIDGE』は“動”。男たちの危険と隣り合わせの演技は迫りに満ちていた。コンセプトチュアルな作りだが、それがきちんと身体の動きに落とし込まれている。音に対する繊細な感性も光る。これからの展開が楽しみだ。審査員賞のチェ・ミンソン／カン・ジンアン『Complement』も徹頭徹尾コンセプトチュアルな作風だが、作り手でもある男女2人の演技にはそのコンセプトからはみ出る魅力があった。とくに女性のカン・ジンアンの無愛想でどこかユーモラスな表現は心に残る。イー・ギョングのソロ『A broom stuck in a corner』（奨励賞）は振付も彼女の踊りも強度に満ち満ちていた。ほかの作品もぜひ見てみたい。今回出場した作品はいずれもさまざまな工夫が凝らされていたが、ダンサーの身体だけが舞台に屹立するような作品も見なかった。次回に期待したい。

浜野文雄

この10～15年で社会に流通する情報量は飛躍的に増大し、社会的流動化が過剰と言えるほどに加速している。その中で、舞台はアナログのまま、従来の役割や、支える仕組みはどんどん疲弊して行くばかりです。流れ行く情報の渦にかき消されることなく、伝えたいことを伝えるためには、どうしたらよいか？この難問を解くためには既存のやり方を手放し、一から新たな手法を模索し続けるしかありません。それがどんな手法なのかを考え続けなくてはいけません。そこにチャレンジしようとする人たちに今年も横浜ダンスコレクション最終審査では出会えました。道に迷った時は身体が役立つと信じている。何もしないで立ち止まって言い訳しているより踊ったほうがいいです。まさしく踊りは生きているからこそできることのひとつなのだから、「自分の思うようにやればいい」と信じて疑わない。救いようのない中に、いつだって未来はあるということを決意して皆さんの審査を通して皆さんに教わったように思います。

矢内原美邦

まず、事前選考にご尽力いただいた審査員と横浜ダンスコレクションのスタッフの皆様に、心よりお礼申し上げます。コンペティションのますますの国際化は、非常に意義深く、成功の証でもある。それはまた事前選考の手間が一層増えることも意味するが、2日間にわたる審査の話し合いは実に刺激的で内容の濃いものだった。

ヨーロッパから来て、ヨーロッパのダンスやパフォーマンスシーンをよく知っている者にとって、横浜ダンスコレクションは日本、韓国、シンガポール等のダンスシーンの現状を知る貴重な機会となっている。ダンスで身を立てるのがフランスよりもはるかに難しい国々の若いアーティストが、真摯に踊りに取り組む姿には圧倒された。

作品の趣旨よりも「物語」に重点が置かれすぎた作品や、概念化が不十分な作品も見受けられたが、技術レベルは総じて非常に高かった。在日フランス大使館協力のもと、来年の3か月間、若いアーティストをフランス国立ダンスセンターに迎えることができるのはとても喜ばしい。その間、アトリエで制作を行い、多種多様な公演・作品を見て回り、毎年6月に開催するCampingという国際的なダンスプラットフォームに参加できる（ワークショップに参加し、作品をフランスで上演）。

エマール・クロニエ